

ローマ人への手紙3章1-20節 「裁きに服す全世界」

1A 神ご自身の真実 1-8

1B ユダヤ人の優れている点 1-2

2B ユダヤ人の不義 3-8

2A 罪の下にある人々 9-20

1B すべての人 9

2B 墮落した姿 10-18

1C 神に対して 10-12

2C 人に対して 13-18

3B 律法の下にいても受ける裁き 19-20

本文

ローマ人による手紙 3 章を開いてください。前半部分 1 節から 20 節までを見ていきます。パウロは、1 章 18 節から、人々が不義によって真理を阻んでいて、神の御怒りが現れているとして、どんどん論じていきました。そして、そのまとめをここ 3 章前半で行います。

前回は、ユダヤ人に対してパウロは語り始めました。ユダヤ人は、神からの特別な啓示、聖書が与えられた民族です。そこに、神の教え、トーラがあります。律法のことです。そして、彼らは神の契約の民となった印として、割礼を受けます。神に選ばれているということで、ユダヤ人は、自分たちは救われていると思い、その印である割礼をもって確実に救いが保障されていると思いました。そして律法を持っているので、これで救われていると思っていました。けれども、パウロがそんなことはないと反論するのです。律法を持っていても、それに聞き従わないのであれば無意味である。割礼も外側の印であって、内実が伴っていなければ無割礼に等しい。「かえって人目に隠れたユダヤ人がユダヤ人」であると論じました(2:29)。

そこで、パウロは、「神がユダヤ人をご自分の民として選ばれたのに、どうしてユダヤ人が内実をともなったユダヤ人となっていかなかったのか？」という問いに答えます。聖書を見れば、神の選びは間違っていたのか？と疑問に持つぐらい、ユダヤ人が神に従っていない姿を見ます。これはキリスト教会も同じですね。キリストに従う者、似た者になるために召されたのに、教会のしていることには、汚点がたくさんあります。では、キリストは真実な方ではないのか？という疑問です。3 章の前半は、この問いにまず答えていきます。

ところで、これまでパウロは、人々が不義と罪の中にいるという事実を、そんなことはないとして弁解する言葉に反論していく形で話を進めてきました。聖書を知らない異教徒の人々が、「知らな

いのだから、責任は問われない。」とする弁解に、「被造物の中に神がおられることは明らかだ」として、弁解はできないことを話しました。そして、「私はそんなことをしていない。」とする、比較的、道徳的に生きている人々に対しては、「自分自身も同じことをしている。隠れたものもすべて明らかにして、神は裁かれる。」としました。自然だけでなく、心にある良心も神がおられることの証しで、良心にかなわないことを行っていないかと思ったら裁かれます。そして、今話したユダヤ人のことを話します。彼らは、自分たちは救われている、神の国に当然ながら入ると思っていましたから、いかにそうでないかを説明しなければなりませんでした。

そしてついに、最後の弁解は、「そういった判断や裁きをする神こそが不正だ、不真実なのだ」とすることです。自己保身のために、神に責めを帰すということ。けれども、これをするんですね、最もいけない言い訳、弁解なのですが、何か都合の悪いことがあると、「なぜ神はこんなことをするのか。」として、自分たちが神の前で悔い改め、へりくだらないといけないのに、その逆のことをするのです。終わりの日には、このことが顕著となり、患難の時代に、反キリストが神を冒瀆することで有名になります。

1A 神ご自身の真実 1-8

1B ユダヤ人の優れている点 1-2

¹ それでは、ユダヤ人のすぐれている点は何ですか。割礼に何の益があるのですか。² あらゆる点から見て、それは大いにあります。第一に、彼らは神のことばを委ねられました。

パウロが、ユダヤ人も異邦人と同じように救いが必要だと教えるので、「では、ユダヤ人に割礼が与えられ、律法が与えられているのは無意味なのか？」という疑問があります。何の益があって、ユダヤ人たちがユダヤ人として選ばれているのか？という疑問です。多くの教会がそのために、旧約聖書を軽視する傾向があります。旧約聖書はイスラエルの民族に関わることで、新約聖書が教会についてのことだから、新約聖書が大事なのだとするのです。そして、ユダヤ民族はキリストを世にもたらした時点でその重要性はなくなった。ユダヤ民族を見る意味はないとします。

けれども、使徒パウロは全く異なる意見を持っています。「あらゆる点から見て、それは大いにあります。」と断言しているのです。ローマ人への手紙において、救いにおいてはユダヤ人とギリシア人に全く差別はないとパウロは論じていますが、救いではないところにおいて、神に愛された、選びの民として証しを持っていることを教えているのです。ですから、私は、自然を見て神のすばらしさを見るのと同じように、今も存在するユダヤ民族やイスラエルの国を見て、神の深いみ旨、ご計画を見えています。

そのすばらしさは、何とんでも「神のことばを委ねられました」ということです。聖書のほとんどが、ユダヤ人によって記されています。旧約聖書はもちろんのこと、新約聖書も、ルカを除けば、

すべてユダヤ人によって書かれています。そして、私たちの手に聖書があることが、ユダヤ人の、神のことばに対する信仰と執着心によるものだとは知らないといけません。前世紀、死海のほとりで発見された死海写本と呼ばれているものをみなさんもご存じでしょう。これは、紀元前二世紀頃のものですが、それまで旧約聖書は紀元後 1000 年辺りのものです。ですから、1200 年間の違いがありますが、死海写本との違いはほとんどないそうです。それだけ正確に写本していたのです。ユダヤ教徒の人たちは写本を、神に仕える礼拝行為として考えていました。主の御名が出てきたら、筆を変えて、水で体を洗い清めていたと言われていました。

2B ユダヤ人の不義 3-8

しかし、それだけすぐれたところがあるのに、それでもユダヤ人は、神のことばにふさわしい生き方をしてきたわけではありませんでした。そこで以下の議論があります。

³ では、どうですか。彼らのうちに不真実な者がいたなら、その不真実は無にするのでしょうか。⁴ 決してそんなことはありません。たとえすべての人が偽り者であるとしても、神は真実な方であるとすべきです。「それゆえ、あなたが告げるとき、あなたは正しくあられ、さばくとき、勝利を得られます」と書いてあるとおりです。

イスラエルの民が真実に生きたわけではない、旧約聖書を見たら神に従わない民の姿があります。新約聖書には、福音書にも使徒の働きにも、福音に反対するユダヤ人の姿を見ます。このような民を選ばれたということは、神の選びは失敗であり、神の真実は無意味になったのではないか？ということに対して、パウロは、「決してそんなことはありません。」と言っています。これは、断じてそのようなことではない！ということで、最も強い否定の表現です。どんなに不真実な者がいても、それは彼らの罪や心の頑なさの問題であって、神ご自身の選びの問題ではない、神は真実とすべきである、ということです。これはイエス様への信仰も同じです。キリスト教会のしたことには汚点がたくさんありますが、イエスご自身に欠点を見いだせないのです。この方への信頼は、信じているとされる者たちの不真実によってかき消されることはありません。

そしてパウロは、詩篇 51 篇を引用していますが、神の真実は裁きによって示されていることを述べています。ユダヤ人たちは、バビロン捕囚などで、その不真実に対する正しい裁きを受けました。神は前もって、彼らご自身に背き続けたら、これこれの呪いがあると警告しておられました。はたしてその通りになったのです。ですから、神の真実は明らかにされました。

⁵ では、もし私たちの不義が神の義を明らかにするのなら、私たちはどのように言うべきでしょうか。私は人間的な言い方をしますが、御怒りを下す神は不義なのでしょうか。⁶ 決してそんなことはありません。もしそうなら、神はどのようにして世界をさばかれるのですか。

イスラエルの不義によって、神が正しく裁かれる方であることが明らかにされました。ということは、イスラエル人たちは、神の義を明らかにするのに貢献したわけで、それなのに神の怒りを受けるといのは間違っている、という議論です。ユダヤ人たちが裁かれることによって、他の国の人々に神の義が明らかにされたのであって、神の器となったのだから、それでも御怒りを受けるといようにしないでほしいという訴えです。ちょっと屁理屈ですね。そのようなことを言ってしまうと、神が世界を裁くことができなくなります。使徒の働きの中で、パウロがユダヤ人と会堂で論じていたら、「この道について悪く言った(19:9)」とかありますが、屁理屈や中傷めいたことを語っていたことが、よくわかります。

⁷ では、もし私の偽りによって神の真理がますます明らかにされて、神の栄光となるのなら、どうして私はなおも罪人としてさばかれるのですか。⁸「善をもたらすために悪を行おう」ということになりませんか。私たちがそう言っていると、ある者たちから中傷されています。そのように中傷する者たちが、さばきを受けるのは当然です。

パウロは、人々の偽りの行いによって神の御怒りが下るが、しかしキリストが御怒りを受けて下さり、それによって神の真理、正しさが現れたと論じていました。神の恵みの栄光が、罪人の中に現れるのです。それだったら、なおのこと罪人として裁かれるのはどうしてなのか？という訴えであります。それだったら、いよいよ罪を犯して、神の善が現れるようにすればいいではないか？ということです。この中傷は結構言われていたようで、6章1節に「恵みが増し加わるために、私たちは罪にとどまるべきでしょうか。」という言葉もあります。神の恵みを知る時に、このような反発があります。「これでは、努力して生きることを怠るようになってしまわないか？」というものです。それで、「パウロの教えは、律法を破れていっていることだ。」として中傷していました。

それに対するパウロの答えは、「中傷そのものが、裁きの対象ですね。」ということです。そうです、ユダヤ人の反発は、自分自身で聖書を調べてはたしてその通りかどうかを見極めていったベレア人のような人々は少なく、多くが中傷であり、それは罪そのものです。そういうことで、神を非難する人々そのものも、その非難のゆえに、神の裁きから免れないことになります。

2A 罪の下にある人々 9-20

ということで、あらゆる人々がもはや弁解ができません。口をつぐむことになります。パウロはそこで結論を出します。

1B すべての人 9

⁹ では、どうなのでしょう。私たちにすぐれているところはあるのでしょうか。全くありません。私たちがすでに指摘したように、ユダヤ人もギリシア人も、すべての人が罪の下にあるからです。

先は、ユダヤ人たちにすぐれているところは、大いにあると言っていたのに、ここでは「全くありません。」と言っています。ユダヤ人が、みことばが任されたりするなど、そういった利点、すぐれている面はありますが、救いに関しては全くないということです。パウロが強調してすぎないことは、「ユダヤ人もギリシア人も、すべての人が罪の下にあるからです。」ということです。だれもが、罪の下にいるということ。「下にいる」というのは、影響力から免れないということです。日本国にいれば、どんな遠い島でも、自分の国の首相は菅義偉さんだということは免れないように、この地上にいれば、罪に支配されているということから免れることはできない、ということです。

2B 墮落した姿 10-18

1C 神に対して 10-12

¹⁰ 次のように書いてあるとおりです。「義人はいない。一人もいない。¹¹ 悟る者はいない。神を求め
る者はいない。¹² すべての者が離れて行き、だれもかれも無用の者となった。善を行う者はいない。
だれ一人いない。」

詩篇 14 篇からです。そこでは冒頭に、「愚か者は心の中で『神はいない』という。」とあります。神を神としてあがめないという根本的な罪があって墮落があります。13 節から、人に対する罪がありますが、ここは、神に対する罪です。神の命じられていることを行えない、正しくない。それから、神の真理について悟れない、神を求めない。神から離れている、それで無用の者となったのです。私たちはとかく、人間の墮落した姿、腐った姿を人と人の中だけで見てしまいます。けれども、1 章後半で見ましたように、神から離れているから、神のかたちに造られた人に対して悪を行ってしまうのです。

2C 人に対して 13-18

¹³「彼らの喉は開いた墓。彼らはその舌で欺く。」¹⁴「彼らの唇の下にはまむしの毒がある。」¹⁴「彼らの口は、呪いと苦みに満ちている。」

パウロは次に、人が人に対して罪を犯している部分を取り上げています。神を神とせず、離れている姿があって、それで人に対して不義を行っています。その始めが、「口による罪」です。詩篇 5 篇と 14 篇から引用しています。先ほど、中傷のこと、悪くいうことに神の裁きがあることをパウロは述べましたが、口に及んでいる不義は非常に大きいものです。「ヤコブ 3:6 舌は火です。不義の世界です。舌は私たちの諸器官の中であってからだ全体を汚し、人生の車輪を燃やして、ゲヘナの火によって焼かれます。」

午前礼拝で、三浦綾子さんの小説「塩狩峠」で、「義人なし、一人だになし」という聖句が前面に出て来るお話をしましたが、その姿を描くために、彼女は、口による災いをこのように説明します。「泥棒と悪口を言うのと、どちらが悪いか」私の教会の牧師は、「悪口の方が罪深い」と言われま

した。大事にしていたものや、高価なものを盗られても、生活を根底から覆されるような被害でない限り、いつかは忘れます。少しは傷つくかも知れませんが、泥棒に入られたために自殺した話はあまり聞かない。だけど、人に悪口を言われて死んだ人や少年少女の話は時折聞きます。..それなのに、私たちはいとも楽しげに人の悪口を言い、また、聞いています。そして、ああ今日は楽しかったと帰っていく。人の悪口が楽しい。これが人間の悲しい性です。」¹まさに、この人間の姿は詩篇にある、「まむしの毒」「呪いと苦み」ですね。

¹⁵「彼らの足は血を流すのに速く、¹⁶ 彼らの道には破壊と悲慘がある。¹⁷ 彼らは平和の道を知らない。」

口の災いの次に、足にも墮落、腐敗が及んでいることを話しています。イザヤ 59 章からの引用です。口だけに終わらず、自分が人を傷つけるために動いていくのです。

¹⁸「彼らの目の前には、神に対する恐れがない。」

口から足、そして目です。これは詩篇の 36 篇からです。

このように全身に、神から離れている墮落が及んでいることがよくわかります。これを神学用語で「全的墮落」と呼びます。すべてにおいて神から離れた罪の性質が及んでいる、ということです。五体満足の人でも、その体そのものに障害がなくとも、何か体を悪くする菌が全身に行き渡って身動きができないのと同じように、罪の影響を受けているので、生活を普通に送っていたとしても、神の前では身動きのできない状態になっています。救いは自分のうちには存在しない、自分のうちに神を喜ばせることのできるようなものが残っていない、ということです。

3B 律法の下にいても受ける裁き 19-20

¹⁹ 私たちは知っています。律法が言うことはみな、律法の下にある者たちに対して語られているのです。それは、すべての口がふさがれて、全世界が神のさばきに服するためです。

パウロがいろいろな聖書箇所から、人が墮落している姿を映し出しましたが、これらはすべて、旧約聖書から、イスラエルの民に対して語られていたものです。つまり、ユダヤ人の人たちは、これらの箇所を見て、自分たちのことではない、異邦人のことだとして見ていたら大間違いだよ、ということです。これは、何度も言いますが、比較的、道徳的な生活をしている人も、宗教的な人たちがこそが、だまされやすいことではないでしょうか。こんな悪いことはしていないと。それが間違っているのは、「律法の下にある者たちに対して語られている」とパウロが語っているように、そういった中にいたとしても、それでも見えてくる墮落した姿なのです。

¹ <http://www.shirakaba.ac.jp/news/2017%E6%A0%A1%E9%95%B7%E9%80%9A%E4%BF%A1%E5%86%AC%E5%8F%B7.pdf>

そして大胆に、「すべての口がふさがれて、全世界が神のさばきに服する」と言っています。すべての口がふさがれるというのは、弁解がもうできないということです。そして、全世界が神のさばきに服します。これが、聖書に啓示されている真理です。どんな人も、地上で裁判所にいかなかった人々も、世の終わりに必ず、全能者、神の裁判に出頭することになります。黙示録 20 章 11-15 節を読みます。

11 また私は、大きな白い御座と、そこに着いておられる方を見た。地と天はその御前から逃げ去り、跡形もなくなった。12 また私は、死んだ人々が大きい者も小さい者も御座の前に立っているのを見た。数々の書物が開かれた。書物がもう一つ開かれたが、それはいのちの書であった。死んだ者たちは、これらの書物に書かれていることにしたが、自分の行いに応じてさばかれた。13 海はその中にいる死者を出した。死とよみも、その中にいる死者を出した。彼らはそれぞれ自分の行いに応じてさばかれた。14 それから、死とよみは火の池に投げ込まれた。これが、すなわち火の池が、第二の死である。15 いのちの書に記されていない者はみな、火の池に投げ込まれた。

パウロは、徹底的にすべての人に、神の裁きの座に着くのだということを語っています。全世界の全ての人です。ユダヤ人は、神の啓示が与えられた民だから、なおのこと、自分たちは裁きから免れると思っているので、彼らをして裁きに服さないといけないと教えています。つまり、ユダヤ人であっても、異邦人であっても、すべてアダムの子であり、アダムが神に罪を犯したように、私たちもみな罪を犯すのです。人には全く義がありません。神のみが、そして神の選ばれた唯一の主イエス・キリストのみが義なる方なのです。

²⁰ なぜなら、人はだれも、律法を行うことによっては神の前に義と認められないからです。律法を通して生じるのは罪の意識です。

律法は、神の正しさと聖さが示されている鏡のようなものであって、自分の罪深さが明らかにされるけれども、律法自体に、律法を行う力はないのだということです。自分が何か、与えられた良心にしたがって行っていくことによって、それで救いを達成することはできないのだということです。何をやっても、神の基準に達することはできません。

次回、ローマ書の中で大事な分岐点を冒頭から読んでいきます。3 章 21 節、「しかし今や」であります。これまでは、人が罪の下にあること、救いようのない存在であることを見てきました。だから、神は、ご自分の義をキリストにあつて、信仰によって下さるということをなさいます。神がその義を、キリストの十字架で示してくださいます。自分の罪がキリストに置かれて、キリストがその対価を支払ってくださいました。